

翼賛選挙と三木武夫

The 21st general election and Miki Takeo

博士後期課程 政治学専攻 2011年度入学

竹 内 桂

TAKEUCHI Kei

【論文要旨】

本稿は、三木武夫にとって2回目の衆院選となる1942年4月の翼賛選挙において、三木がどのような選挙戦を展開したのかを考察するものである。

三木は翼賛政治体制協議会から推薦されず、厳しい選挙戦を戦った。本稿ではまず、三木が推薦されなかった理由を検討し、徳島政界において影響力を有していなかったこと、三木に対する反感があったと思われること、翼同による現職議員の推薦増加を目的とした巻き返し運動の対象外となったことが、三木の非推薦の理由になったものと推測した。

次いで三木の選挙戦を検討した。非推薦候補として三木は、官憲からの干渉を受けながら選挙戦を戦った。そうしたなかで三木は翼賛議会の確立、大東亜共栄圏の確立など、戦時下の総選挙を反映した事柄を訴え、またいかに自らが地元に着目した代議士であったかということも強調している。

投票の結果、三木は最下位で当選を果たした。その要因となったのは、選挙区内の地盤が他の候補者と比べて有利だったこと、選挙区内における三木の地盤が強くなっていたこと、地元に着目した活動が評価を受けたという点にあった。

【キーワード】 三木武夫、翼賛選挙、徳島2区、翼賛政治体制協議会、非推薦

はじめに

1942年4月30日、第21回衆議院議員総選挙、いわゆる翼賛選挙が施行された¹。戦時下に実施された唯一の総選挙である。

この選挙の特徴は、政府が好ましいと判断した候補者を事実上推薦した点にある。翼賛政治体制協議会（以下、翼協）が結成され、候補者の推薦、支援を行った。翼協の推薦を受けたのは衆議院の定数と同数の466名である。このうち381名が当選しており、当選率は81.7%に上った。これに

対して、613名が立候補した非推薦候補者で当選したのは85名にすぎず、当選率は13.5%にとどまった。非推薦候補となった場合には、当選することがいかに難しかったかを示す数値であろう。

この85名のうちの一人が、三木武夫である。1937年4月の衆院選で初当選を果たした三木にとって、翼賛選挙は2回目の選挙となった。この選挙で三木は翼協から推薦されず、苦しい選挙戦を余儀なくされた。それでも三木は最下位ながらも推薦候補者を押し退けて当選している。

すでに別稿で指摘したように、三木の19回連続当選のなかで、初期の1回目（1937年4月）と2回目（1942年4月）、最後の19回目（1986年7月）は、三木にとって落選の可能性が高い選挙であった²。本稿は、三木武夫が翼賛選挙にどのように対応したのかを考察するものである。

三木と翼賛選挙については、戦前・戦中期における三木の政治活動を検討した先行研究でも触れている³。しかし、三木の翼賛選挙への対応、非推薦候補でありながら当選した要因、投票結果の分析等については、十分に検討がなされていない。とりわけ徳島政界の動向や選挙結果などの分析については、十分なものとはいえない⁴。

こうした研究状況をふまえ、本稿では翼賛選挙と三木武夫について検討する。具体的には、第1に、三木が翼賛政治体制協議会から推薦されなかった要因を考察する。第2に、三木がどのような選挙戦を展開したのかを検討する。三木は、選挙戦のなかで有権者に何を訴えたのか、また非推薦候補として官憲からいかなる取り締まりや弾圧を受けたのか。第3に、三木が出馬した徳島2区における投票結果を分析したうえで、非推薦候補でありながら三木が当選した要因を指摘する。

1 非推薦候補となった要因

1941年12月8日、東條英機首相は、翌42年4月に次期総選挙を実施することを明らかにし、以後、政府内において来るべき総選挙について検討されていく⁵。その中心を担ったのは内務省である。湯沢三千男内務次官が中心となり、陸軍省や大政翼賛会、東條英機首相などと協議を重ねた結果、翌42年1月下旬に、候補者推薦の団体を結成し、これに大政翼賛会が協力するという大枠が決められた。その後2月18日、東條内閣は「翼賛選挙貫徹運動基本要綱」を閣議決定した。この要綱では翼賛議会の確立を目指すことを謳い、また、「啓蒙運動ノ徹底」「候補者推薦気運ノ醸成」「選挙の倫理化と戦時態勢化」の三点が、選挙を実施するにあたっての方策とされた。つまり、事実上政府が翼賛議会に相応しい候補者を推薦することが、内外に鮮明にされたのである⁶。

候補者推薦制度の採用が決定された後、政府は候補者を推薦する組織の結成に向けて動き出した。その結果、2月23日に結成されたのが、翼協である⁷。会長には阿部信行陸軍大將が就任したほか、各界代表の32名が会員となった。翼協は2月28日に総会を開催し、①東京に本部を、各道府県に支部を設置する、②各支部の会員は15名から20名を基準として本部が委嘱し、委嘱された会員のなかから支部長を指名する、③候補者の推薦については各支部が候補者を本部へ内申した後、本部において決定する、などを骨子とする候補者の推薦の方式を決定した。

この後、翼協の各支部長が内定している。徳島県支部長に内定したのは、大久保義夫である。大

久保は協町町長（1921～1946年）、県会議員（1915～1919年）、全国町村長会副会長（1940年）、中央協力会議員（1940年）などのほか、徳島県内のさまざまな団体のトップを務めた経歴を持ち、徳島政界における有力者の一人であった⁸。

支部長に続き、辻山治平知事と大久保義夫が中心となり、支部会員の人選がなされた。その人員は、井内太平（徳島商工会議所顧問）、湯浅信次郎（県信購販連会長）、富田加久三（県議）、長尾義光（県翼賛壮年団長）、谷原公（弁護士）、庄野祐吉（小松島町長、県会副議長）、森六郎（徳島商工会議所顧問）、吉見勢之助（徳島商工会議所会頭）、多田宗泰（県農会長）、坂本政五郎（徳島新聞社長）、岸野牧夫（県会議長）、谷伊七郎（撫養町長、県議）、大西角平（徳島市警防団長）、佐藤豊（陸軍大佐、徳島市翼賛団長）、原田量之（県議）の15名である⁹。

他の支部と同様、支部会員には徳島県下の政界、経済界、軍人といった各界から幅広く人材が登用されている。このうち、県議経験者は大久保義夫、湯浅信次郎、富田加久三、谷原公、庄野祐吉、坂本政五郎、岸野牧夫、谷伊七郎、原田量之の9名で、支部会員の半数を超えていた。こうして、支部長の久保を中心として、16名の会員によって推薦候補者が銓衡されることになった。

しかし、この銓衡は容易に纏まらず、徳島県の推薦候補者が決定されるまでには、紆余曲折を経た。これは1区の推薦候補者をめぐって、翼協本部と徳島県支部との協議が難航したためである¹⁰。翼協徳島県支部は3月31日になって本部に内申する推薦候補者を決定した。その際の推薦候補者は、1区が谷原公、紅露昭、井内太平、2区が秋田清、三木與吉郎、三木熊二であった。しかし、その後1区の現職議員だった田村秀吉が巻き返しをはかり、翼協本部は最終的に井内に代わって田村を推薦候補者とした。その一方で、三木武夫が出馬した2区については、徳島県支部の内申通りに推薦候補者が選定されている。つまり、三木武夫は徳島県支部の内申の段階から推薦に漏れており、さらに翼協本部でも三木武夫の非推薦については再検討されなかったのである。

なぜ三木武夫は推薦候補者とならなかったのか。次にその要因を検討したい。ただし、翼協は推薦候補者の決定にあたってその理由を明示しておらず、また管見の限り翼協徳島県支部の関係者の史料も存在しないため、状況から推測せざるを得ない。

非推薦となった理由について、三木自身は戦後に、「三木は親米論者であり、したがって非国民である」という「奇妙な論理」のため、翼協から推薦されなかったと主張している¹¹。ここにある「親米論者」とは、三木が同士とともに日比谷公会堂で日米親善国民大会を開催したことや、金子堅太郎などと1938年5月に日米同志会を結成したことを指している¹²。三木は、「日米が戦って、日本が戦争に勝利を得るということは考えられない。日米が首脳会談を開いて戦争を回避せよ、という立場」から、日米親善国民大会を開催したという¹³。この活動から、「ほくみために、あんな『日米同志会』を結成して、日米親善大会を日比谷でやるようなやつは、もっとも非推薦にふさわしい、札付きである」とされて推薦されなかったと三木は主張するのである¹⁴。

三木の回想によると、この日米親善国民大会において、三木は「石油ももたない日本が、どうしても長期戦を戦っていけるのか。アメリカとしても、一死報国の念に燃える日本軍を相手に、どれだ

けの生命の犠牲者を出そうとするのか」と疑問を投げかけた上で、「日米首脳が戦争にあらず、平和的に今日の対立を解決するよう全力を尽くすことが、両国の政治家の責務ではないか。日米首脳の会議で解決は不可能とは言えず、「この戦争の流れをかえようではないか」と訴えたという¹⁵。

しかし、竹中佳彦が指摘するように、1938年の段階で戦争を想起するほど日米関係は悪化しておらず、三木の主張はアジア・太平洋戦争の実相に近すぎると言わざるを得ない¹⁶。果たして、この日米親善国民大会は日米間の戦争回避を目的とする大会だったのか。

この点について、この大会を報じた当時の新聞のうち、『読売新聞』と『羅府新報』に興味深い記事が掲載されている。すなわち、『読売新聞』には、「今時事変を通じて米国民が終始一貫中立の態度を堅持してゐるに對し日本国民として感謝の意を表すべく」¹⁷とあり、『羅府新報』にも「事変開始以来終始公平なる中立態度を持し続けて來た米國に對する感謝の念を表明する日米親善國民大會」とある¹⁸。『羅府新報』にはまた、三木武夫の起草によるこの大会の決議文が掲載されている¹⁹。

決議文

日支事變勃發以來共產黨の暗躍により企てられつゝある日貨ボイコットにも関わらず合衆國政府および國民が終始冷靜慎重なる態度を持し來つたことに對し日本國民は深くこれを多とするものである。こゝにわが日本國民は日米間の親善を増進し、よつて世界平和人類の福祉に貢獻せんことを期するものなり。

以上の記事や決議文を見る限り、日米親善国民大会は三木が主張するような、日米間の戦争回避を目的とする大会だったとは評価できない。アメリカが日中戦争に対して中立を保持していることに謝意を示し、その中立維持を継続させるべく日米の親善関係を深めることにこの大会の狙いがあったのである。ここでアメリカが中立の態度を保っていたというのは、アメリカが中立法を日中戦争に適用しなかったことを指している。中立法が適用されると、交戦中のいずれの国々にも物資が供給されることが定められていた。物資の大部分をアメリカに依存していた日本にとって、中立法が適用されるか否かが日中戦争遂行の鍵を握っていた。三木たちは、日中戦争への遂行に影響を及ぼさないようにするため、アメリカとの親善を訴えたのである。

そうすると、親米論者であって非国民とされたために非推薦となったという三木自身の説明には疑問を抱かざるを得ない。戦争下にあつて、アメリカへの留学経験が三木武夫にとってマイナスに作用した可能性はあるが、仮にそうだとしても非推薦となった決定的な理由ではないだろう。

では、非推薦となった理由として、他にどのようなことが考えられるだろうか。すでに言及したように、三木武夫は翼協徳島県支部の内申段階で推薦候補者から漏れていた。従つて、徳島政界における三木の影響力の少なさが非推薦の理由となっているとみるべきであろう。この点について、竹中佳彦は翼協徳島県支部に三木に対する反感が強かったことと、翼同による現職優位への巻き返しの影響が三木に及ばなかったことにその理由を見いだしている²⁰。こうした竹中の推測が、実際の非推薦の理由に近いと思われる。ただし、竹中はその詳細について検討していない。ここでは、竹中が推測した点を詳細に見ていきたい。

第1に、徳島政界のなかで三木武夫を積極的に推薦しようとする勢力が存在していなかったことである。三木の当選後、大久保義夫支部長から三木に、「第二選挙区の定員は三名であり推薦は三名を限度としその決定は委員の賛否によるものであった。不幸にして貴殿はその選にもれたものであり他意はなかった」という旨の手紙が送られている²¹。また戦後、三木武夫の非推薦の理由について、「三木は弾圧を受けたことを看板に宣伝しているが、実際は年齢と政治的経験の不足で選にもれた」との説が存在していた²²。これらが示唆するのは、三木武夫の徳島政界における影響力が、翼賛選挙の段階ではまだ強くなかったということである。三木が地方政治の経験を持たず、前回の総選挙で突如出馬して当選した1年生議員であることを考えるならば、当然のことではある。

三木の県政界における影響力の弱さは、翼協徳島県支部の会員との関係が希薄だったことにも表れている。翼賛選挙の期間中に有権者に配布したパンフレットのなかで、三木は以下のように述べている²³。

不肖は未だ微力にして之等委員の方々とは其の四五名を除き殆ど御相識の関係にも立たず、況んや唯一回の御面識もなき方々さへあるので御座いました。尚具体的推薦規準等は御示し賜はず、況んや御発表もなかつたわけであります。之等各位は所謂地方の御有力者として何れも賢明なる方々と信じますから斯る懸念は毛頭ないとは存じますが、然し凡そ世に「相識の関係に立たざれば事にうとし」と申す事も御座いますので、或はこうした御関係から不肖本来の不徳と相まちまして、遂に御推薦なかつた、わけのものではなかつたか、と斯様にも拝察仕るのであります。

三木は、翼協徳島県支部の会員に知己が少なかったために、自らが推薦されなかったのではないかと推察しているのである。県内の各界の有力者が支部会員に就任したことは先述の通りである。三木は代議士として活動していたものの、依然として各界の有力者との関係を十分に築いていなかったというわけである。こうしたことから、徳島における三木の影響力が脆弱なものであり、積極的に三木武夫を推そうという勢力が存在していなかったと思われるのである。

第2に指摘すべきは、徳島県内の旧政友会と旧民政党の関係者から、三木は良い感情を抱かれていなかったであろうという点である。そもそも三木は、1937年の初出馬の際、既成政党を批判して当選を果たしていた。その三木を、批判された側の政党関係者が推薦しようとするだろうか。加えて、三木は初出馬の際、対立候補で民主党の県連部長だった高島兵吉の陣営の坂本政五郎から、次回の選挙で高島が出馬せずに三木の選挙事務長を務めるので出馬を見送ってほしいと打診されていた。三木はこの申し出を断って出馬し、選挙の結果、高島は落選した。三木に出馬見送りを直接依頼した坂本は、すでに見たように翼協徳島県支部の会員であり、推薦候補者の銓衡に関与している。また、他方の政友会についても、三木は当選後に政友会入りを勧誘されたが、これを固辞している²⁴。こうした初出馬時の問題から両党関係者の三木武夫に対する印象は芳しくなく、三木武夫の非推薦に関係していると考えられる。

さらに、秋田清の意向が反映されたのではないかと推測する。この点について、徳島県支部長の

大久保義夫と秋田清との関係を看過することはできない。大久保は、翼賛選挙以前から秋田の選挙参謀を務めていたほか²⁵、翼賛選挙でも秋田の推薦届出人となっており²⁶、両者の関係は密接であった。支部長の大久保が、特定の候補者と密接な関係を有していたことは、銓衡過程に影響していると思われる。1937年の総選挙の際、秋田清は三木武夫を泡沫候補とみていた。しかしその三木が徳島2区でブームを起こし、自らの票に三木が2千票近くまで迫ったことで、以後の選挙を見据えて三木に一目を置かざるをえない状況になっていた。そのため、秋田は大久保を通じて三木武夫を非推薦とすることで、落選の可能性を高めようとしたのではないだろうか²⁷。

また中央政界について見ると、三木は、現職議員の推薦増加を目指した翼賛議員同盟（翼同）の巻き返し運動の対象とならなかった。翼賛選挙では当初新人待望論が喧伝されるなかで、多くの新人候補者が推薦を受けると見られていた。このため翼同は巻き返しをはかり、その結果、当初の各支部の内申よりも推薦を受けた現職議員は増加した。三木も1941年9月に翼同が結成されるとこれに加わっていた。しかし、翼同の巻き返しの影響が三木には及ばず、三木は推薦を得ることができなかった。この理由も推測するほかないが、三木が政党に属したことがなかったことが影響しているものと思われる。初当選後、三木は衆議院の院内会派であった第二議員倶楽部（1937年7月）や時局同志会（1938年11月）には加わったものの、政党には属していなかった。翼同が推薦の巻き返し運動の対象をかつて政党に所属していた議員に絞ったのであれば、三木を推薦候補とするべく翼協本部に働きかける可能性は存在していなかったことになる。また、秋田清の意向によって三木が徳島県支部で推薦されなかったのであれば、中央においても三木が推薦されるようなことはなかったであろう。

以上のように、三木武夫が翼協から推薦されなかった理由としては、①徳島政界における三木武夫の影響力がまだ強くなかったこと、②徳島政界において三木に対する反感が強かったと推測されること、③徳島政界の実力者だった秋田清の意向が反映されていると思われること、④中央政界においても、旧政党人ではなかったため、推薦者増加を目的とした翼協による巻き返しの対象外となったであろうこと、という点にあったと考えられるのである。

2 選挙戦の展開

翼協からの推薦を得られずに出馬を断念する候補者もいたなかで、三木は「何するものぞ、という非常な憤りがあった」ため、非推薦でも立候補する決心を固めた²⁸。非推薦での出馬を決めた後、三木は選挙運動の中心となる陣営を固めていく。しかし、非推薦となったため、選挙区内の「顔役」からの支援をほとんど得られなかった²⁹。そのため、三木の陣営は、初出馬時からの支援者や友人が中心となった。選挙事務長には桜木千秋が起用された。桜木は徳島商業高校から明治大学にかけての同級生であり、三木の最初の選挙でも三木を手伝っていた。また、三木の応援弁士としては、明治大学教授の赤神良譲、早稲田大学教授の吉村正、早稲田大学卒業後に東洋経済新報社に入社した石田博英が、1937年の選挙から引き続き弁士となったほか、三木の明治大学時代の恩

師である春日井薫と佐々木吉郎も三木を応援するべく徳島に駆け付けた。この他、三木を応援する青年たちが運動員として活動した。

こうして自らの陣営を整え、三木は選挙戦を展開していく。しかし、三木は非推薦候補として「県庁、翼賛会、翼賛壮年団、警察、憲兵隊等の全組織をあげての言語に絶する弾圧を受け」ながらの厳しい選挙を戦うことを余儀なくされた³⁰。官憲による干渉や妨害は候補者本人だけにとどまらず、三木の運動員、さらには三木の支持者にも及んだ。

候補者本人への妨害としては、憲兵隊からの呼び出しがあった。このことについて、三木は次のように振り返っている³¹。

憲兵隊からは、ぼくに対して呼び出しが時々来る。直接介入ですよ。それでぼくがいくと、「選挙はどうですか」と言うんです。「どうですかって、ひどいじゃないか。憲兵隊にぼくが呼ばれるということは、たいへんな脅威を事務所に与えるんだ。選挙はどうだ、というようなことでぼくをここへ呼ぶのはひどいじゃないか。そんなことなら、あなたのほうが我々よりずっと情報を持っているんだから、以後ぼくを呼び出さないようにしてもらいたい」と言うのと、「いや、これは上からの命令ですから」と言うんですよ。

三木が述べるように、選挙戦のさなかに憲兵隊が候補者本人を呼び出すことは、陣営に大きなプレッシャーを与える行為であった。三木が憲兵隊に抗議したことで、呼び出しの回数は減ったものの、最後までこうした呼び出しが止むことはなかったという。

三木の運動員にとっても、官憲からの干渉や監視を受けながらの選挙戦となった。三木の選挙事務所には警官が出入りしたほか、特高警察による監視も行われた³²。応援弁士も同様で、石田博英は大阪から徳島に向かう船で、私服の刑事から「何をしに行くのか」「候補者とどういう関係にあるのか」「非推薦の候補を応援することに、国民としての反省はないのか」といった「いやがらせ」を受けている³³。応援弁士にとどまらず、若い運動員にも尾行がついた³⁴ というから、非推薦候補者の運動員に対する監視、取締りは徹底していた。

また警察や憲兵隊による干渉や圧力は、自身とその運動員だけにとどまらず、三木の支持者にも及んだ。三木は支持者への干渉として、虚偽の召喚状と土建業者への請負の締め出しを挙げている。虚偽の召集状は、警察が三木の支持者と判断した有権者に送ったもので、出頭すべき日時と警察署が葉書に印刷されていた。三木が警察に抗議しても、警察側からは「こちらは呼ばないのに、それはひどいことです」との返事があるだけだった。こういった葉書が選挙区内に大量に送られてきたという³⁵。また、土建業者への請負の締め出しについて、三木は、自らの支援者だった請負師の佐々木力三郎が県庁に呼び出されて「お前、三木の応援をやるんだったら、請負いから全部しめ出すぞ」と言われ、佐々木から「昭和の御代に、こんなことがあっていいんでしょうか」と嘆願されたことを明らかにしている³⁶。佐々木は県庁から圧力を受けても三木を支援したが、推薦候補者の支援を余儀なくされた請負師もいたものと思われる。

こうした逆境のなかの選挙戦で、三木が中心に据えたのが言論戦である。翼賛選挙でも三木は、

得意の弁論による選挙戦を展開し、演説会で多くの聴衆を集めていた。県情報課が収集した情報によると、投票前日の4月29日までに各候補者が行った演説回数と聴衆数、ならびに一回あたりの聴衆数は、以下の通りであった³⁷。

【表1】徳島2区における候補者別の演説の概要

候補者名	演説回数	聴衆数	1回あたり
秋田 清	47回	4096人	87人
三木興吉郎	43回	3145人	73人
三木 武夫	65回	9313人	143人
三木 熊二	40回	2734人	67人
真鍋 勝	70回	3794人	54人

徳島の選挙区では事前に警察から、演説会は各候補者につき75回以内とする、自動車の使用は1台とするといった選挙協定が各候補者に言い渡されていた³⁸。前回の衆院選と比べ、演説回数が減少しているのは、この協定のためである。それでも、三木武夫が行った演説会の一回あたりの参加者は候補者のなかでただ一人百人を超えている。一度に701人が集まった演説会もあった³⁹。最終的に三木は74回の演説を行っている。これは75回の限度回数まで演説した真鍋に次ぐ回数である。

多くの聴衆が集まったとはいえ、非推薦候補者だったため、三木は官憲からの監視を受けながら演説会を行わなければならなかった。その監視について、三木は次のように回想している⁴⁰。

それが演説会はいっぱいなんです。ただ私服の警官が三〇人ぐらい来ているわけです。演説の最初と終わりはいいんだけど、途中で拍手すると、すぐ私服がその人のところへ行って「えらい熱心じゃないか、候補者とどういう関係があるのか」とこうくるわけです。

演説で三木がどのようなことを訴えたのか。この時の三木の選挙に関わった樋口政市によると、三木は演説会で「何故推薦されなかったか納得ができないと訴えた。私は日本人である。国家国民を愛する心情は誰にも負けるものではない。他の候補者に劣るものではないと叫びつづけた」という⁴¹。三木は、有権者に自らが日本人であることをことさら強調する演説を行っていた。後述するように、自らの留学経験が選挙区内で悪く流布されていたためである。

三木の主張の詳細は、三木が有権者に配布した選挙公報とパンフレットからわかる。

選挙公報⁴²で三木は、「吾が大日本帝国が旭日昇天の勢をもつて肇国の理想たる八紘為宇的世界経綸」を実現させたことは「感激の極み」であるとして、開戦後における日本の戦況への感動を率直に表した。また、感動を述べる一方で、「軍神又は護国の華として散華」した戦没者に「深甚なる感激の情を披瀝」し、戦傷者には速やかな快癒を祈る旨を祈り、遺族には「厚く厚く御慰めの言葉を捧げさせていただきます」として弔意を表している。その上で、「如何なる困難に遭遇致しませうとも終始此の感激を以て戦ひ且戦ひに勝ち抜くばかりであ」との決意を示した。三木は、明確に戦局下における日本の状況を追認している。

次いで「政見の一端」を披露する。三木は、現在の政治の根本は「大東亜戦争の完遂八紘為宇的世界経綫の断行」にあると捉えていた。そのために実現すべき事柄として、二点挙げている。第1に、大東亜共栄圏確立の必要性である。三木は、「戦ひが益々相互国家の総力長期戦となつたのでありますから広く大東亜圏内の人的物的資源を含めた内外諸機構の整備統一強化は一層高度化されねばな」らないと説く。これにより、「米英の称号する所謂長期経済戦なるものに絶対的優位を占め得る事が出来る」からである。

第2に、翼賛議会の確立である。三木は、翼賛を「吾が皇国民のみが誇有せる世界無比の臣道倫理でありまして即ち国体の精華」と考えており、「上御一人に対し奉り国民の総てが自己の身心財物の一切を其の力の限りに於て捧げ尽す謂であ」るとして、これを礼賛する。そのように考える三木からすれば、当然「議会も亦所謂翼賛議会でなくてはな」らない、ということになる。その議会は「政治を国民の奉賛体として統一純化せしむべく吾が不磨大典の憲法が国民に命じた謂はば一億の民生が其の代表者を以て精進潔白の姿に於て互に切磋琢磨以つて最も能動的な眞の翼賛精神を和賛のうちに顕揚せむとする政治勤行の府」であり、そのような議会には、「このみちをわきまへざるもの」や「此の勤行に耐へ得ざる程の似て非なる政治家」が選ばれるべきではないと主張する。そして、それまでの選挙とは異なり、「政治家としての識見人格」、特に「愛国的勇氣」と「熱情如何」が問われる今回の選挙で、自らこそが「翼賛精神に燃ゆる立候補者」であるとして、有権者に自らへの投票を呼びかけたのである。

また、この公報の最後で三木は、「何れ詳細は政見発表演説会に於きまして申し上げさせていただきますと存じます」として、自らの演説会への参集を呼びかけている。得意の弁論をもって、得票を伸ばそうと意図したわけである。

一方三木が有権者に配布したパンフレットでも、同様の主張がなされている⁴³。三木は、翼協の推薦を得られなかったことで「烈々の表情を各位に披瀝さしていただかねばならぬ」との判断からこのパンフレットを有権者に配布した。なぜならば、非推薦ということ自体が仮に「斯る候補者は翼賛的政治家に非ずとか或は其れに乏しきものであるとか申す意味を毫末でも持つ」のであれば「実に不測の如何の事であり」、このことを放置すれば「大義名分が相立たぬは勿論ひいては永久なる政治生命の上に想はざる不覚あるを予想さ」れるためである。つまり、三木は自らが翼賛的政治家であることをアピールするとともに、非推薦について沈黙することは翼賛選挙だけにとどまらず将来にも影響すると考えたのである。

また、「子が母の愛にすがり訴えるが如き心情の下に各位の前に既往一身の告白を捧げまして以て最も神聖なる御審判をうけたい」、あるいは、「皆様御家族の一員に加へていただいたつもりで、嘘を言はぬ、尊大に構へぬ、平凡ながら、唯一生懸命立ち働く代議士に心に満ち」ているなど、家族を連想させる表現を用いて有権者の情に訴えている⁴⁴。そして「かくれたる清一票を『ミキタケオ』のために御与へ下さらんことを厚く厚く茲に謹んで御願ひいたします」として自らへの投票を呼びかけた。ここでカナで敢えて自らの氏名を記しているのは、有権者が実際に投票することを意

識してのことであろう⁴⁵。

次いで、三木は自らの「本質」を披瀝している。第1に、三木は自らが日本精神を信奉していることを強調する。すなわち、三木は「日の丸の崇高さを世界の隅に立つて仰拝した感激の極み、私は飽迄祖国の精神に生き以つて大政翼賛のみちに一路邁進仕るものである」というのである。無論、三木がこうに強調するのは、戦争下で実施される総選挙を意識してのことである。この点は三木以外の候補者も同様である。ただし三木の場合、自らの経歴から自らが日本精神の信奉者であることを特に強調する必要があった。自らが二度にわたって欧米へ視察や留学を行った関係から、「俗解的な意味に於ける、米欧の思想かぶれでもあるのではないか、と申さるるかも知れ」ず、また「牽強附会的に用ひまして、強いて私をして想はざる思想的被疑者の地位に陥ち入らしめんとするものもある」ことを聞知したためである。三木はこれを、「実に笑止の極み」で「一顧の価値だになき虚構の事柄」として明確に否定し、更には「如何にしようとも染まらないものの本質が所謂日本精神だ」とまで断言するのである。

第2に、三木が「政治家の本質」と位置づける、衆議院議員としての活動である。三木は、「苟も議会行動の不明なる政治家は真に民意輿論の代表者と申す事は出来ない」とし、「各位負託の名に恥ぢぬ代議士」である自分がどのような議会活動を行ったのかを説明する。三木は、初出馬の際に既成政党を批判して中立で立候補して当選を果たした。その後も既成政党には所属せず、第二控室や時局同志会といった小会派に属し、「少数ながら同志のものと議会発言権を得」て、「只管自己の信念に基く確固不拔の議会過程に精進」したと強調する。もっとも、1941年9月に翼同が結成されると、三木も翼同に参加している。これについては、「若き政治家が次の祖国挺身に構ふる純粹無垢なる待機姿勢と申すべきもの」として、有権者に理解を求めた。その上で三木は、代議士としての活動について「翼賛の事実と相反するが如き寸毫疑点のなかつた事は速記録が明記の通りであり、「苟も忠誠に基かざる発言はなく、終始臨戦下又は決戦体制下の実情に鑑みまして、我が不動国策の支持、政府の鞭撻に燃ゆるが如き愛国の熱情と赤誠を捧げつくしてまいつた」と主張するのである。

また、後述するように、初当選後に三木は陸軍病院慰問や議会報告演説会、更には政情視察のために毎年徳島に戻っていた。このことを訴えることで、衆議院議員が「世界大勢の動向への活眼」とともに「地方の実情につきましても不断なる関心態度」を有していることを有権者に印象づけようとしている。

こうして三木は、当選後「殆んど各年とも歳の大半を挙げて実際に議会職域奉公のため日夜努力を傾注し以つて各位の代表として、最も真剣に且つ公明正大に過怠なく負託の重責を果してまいつた」と誇示して、自らへの投票を訴えたのである。

なお、このパンフレットで三木を推薦している人物が興味深い。第1に、清瀬一郎、田辺七六、内田信也、内ヶ崎作三郎、小川郷太郎、大口喜六、風見章、金光庸夫、小泉又次郎、小山松寿、桜内幸雄、島田俊雄、田子一民、高田転平、俵孫一、中島知久平、増田義一、町田忠治、松野

鶴平の19名が、三木の推薦人に名を連ねている。彼らは三木と同じ翼同に所属しており、三木が国会議員として活動する中で、関係を築いていった政治家であろう。この19名のうち、翼協から推薦されずに立候補を断念した風見以外は、推薦候補者として翼賛選挙に出馬している。つまり、風見以外の18名は、自らは推薦候補者でありながら、非推薦候補の三木武夫を応援したのである。徳島2区では定数と同じ3名が推薦候補者となっており、この18名は徳島2区の推薦候補者が全員当選することではなく、三木武夫がその一角を崩して当選することを有権者に訴えたことになる。翼同による巻き返しの対象とならなかった三木を、多少なりとも応援しようとしたのだろうと考えられる。

第2に、この19名とは別に、頭山満が三木を推薦している。頭山は、国家主義団体の玄洋社を率い、金玉均や孫文、ビハリ・ボースなどとも親交があった右翼の巨頭である。その頭山が「三木武夫君は識見人格卓越、殊に思想上精神上立派なるものにて先回当選後は勿論既成政党にも這入らず、終始愛国の熱情を以て大政翼賛のため努力致されたるは小生の堅く存知する所」であり、「凡そ熱情なきものに感恩望み難く況んや真の政治家は得難き御承知の通りに就き何卒同君に御支援賜はり度厚く希上候」として、徳島2区の有権者に三木への投票を求めているのである⁴⁶。

徳島県選出の一年生議員だった三木が、頭山と面識を持っていたとは考えにくい。おそらく、三木と頭山とを結びつけたのは、頭山と福岡で同郷の金子堅太郎と思われる。1938年2月に日米親善国民大会を開催した三木は、金子堅太郎を会長とする日米同志会を結成し、自らは専務理事に就いた。特に1939年4月には、赴任地で死去した斎藤博アメリカ大使を移送したアストリア号の歓迎事業で金子と協働していた。その金子を通じて、三木は頭山に推薦を依頼したのである。

総じて、この選挙で三木が有権者に訴えたのは、パンフレットの最後に「聖戦を貫徹し大東亜を建設し以て八紘為字の世界経綸を行ふ一億一心の政治」⁴⁷とあるように、翼賛議会の確立や大東亜共栄圏の確立など、戦時下に実施された選挙戦を反映した内容である。こうした主張は三木だけが特に行っていたわけではない。そもそもこの選挙戦では争点が明確ではなかった。そのため三木は、自らがいかに選挙区内のことに熱心に取り組んだかをアピールし、他の候補者との相違を明確化しようとはかったのである。

こうして三木は、非推薦候補として選挙戦を戦った。自らの当落については「大丈夫とは思わない。もう落選したと思った」が、一縷の希望を持っていたという⁴⁸。

選挙の投票は4月30日に行われた。開票の結果、三木武夫は、秋田清、三木與吉郎に次ぐ3位で当選を果たした。当選後、三木は泣きながら「非常な苦戦の中に当選さして戴いて全く感涙感激の外はありません、この尊い感動を政治の上に生かして真に翼賛議会の確立ひいては大東亜戦争完遂、大東亜共栄圏の国策に命がけの御奉公を誓ひかたがた自らも修養、精進を重ね立派な政治家になりたいと思つてゐます」と述べた⁴⁹。自らに票を投じてくれた有権者への感謝の念を述べるとともに、戦争完遂、大東亜共栄圏確立のために政治活動を行うことを強調したのであった。

3 得票の分析と三木武夫の当選要因

以上、翼賛選挙時において三木武夫が非推薦候補となった要因とその選挙戦を明らかにした。ここでは、徳島2区の投票結果を分析し、その上でなぜ非推薦候補でありながら三木武夫が当選したのかを考察する。

3-1 徳島2区の得票結果

投票結果を分析するにあたり、まず徳島2区の有権者数を確認する。この選挙における有権者数は、板野郡24,362名、阿波郡8,140名、麻植郡10,352名、美馬郡18,429名、三好郡14,922名の計76,205名である⁵⁰。郡ごとの有権者数の差異が大きく、その差異が選挙結果に影響を与えていることが、この選挙区の特徴である⁵¹。

次に選挙の結果をみていく。各候補者の郡別の得票結果は、以下の通りである。

【表2】1942年4月執行 衆議院議員総選挙の得票数

	秋田清 推薦 前		三木與吉郎 推薦 新		三木武夫 非推薦 前		三木熊二 推薦 新		真鍋勝 非推薦 前		計
板野	1,324	8.95%	11,611	91.76%	6,551	53.47%	450	4.28%	230	2.31%	20,166
		6.57%		57.58%		32.49%		2.23%		1.14%	
阿波	494	3.34%	358	2.83%	2,585	21.10%	2,958	28.11%	225	2.26%	6,620
		7.46%		5.41%		39.05%		44.68%		3.40%	
麻植	619	4.19%	236	1.87%	1,080	8.82%	5,896	56.04%	348	3.49%	8,179
		7.57%		2.89%		13.21%		72.09%		4.26%	
美馬	4,899	33.19%	228	1.80%	641	5.23%	1,096	10.42%	6,944	69.71%	13,808
		35.48%		1.65%		4.64%		7.94%		50.29%	
三好	7,452	50.39%	221	1.76%	1,395	11.39%	122	1.16%	2,215	22.23%	11,405
		65.34%		1.94%		12.23%		1.07%		19.42%	
計	14,788	当選	12,654	当選	12,252	当選	10,522	落選	9,962	落選	

※ 『第二十一回衆議院議員総選挙一覧』（衆議院事務局，1943年）より作成。各候補者の左側の数値は得票数，右側上段は，各候補者の総得票に対してその郡の票が占めている割合，下段が各郡の総得票に対してその候補者の票が占めている割合である。

まず推薦候補者の秋田清，三木與吉郎，三木熊二の得票を分析する。

秋田清の得票は，地盤の三好郡と，三好郡に隣接する美馬郡の票が中心である。三好では同郡の65.34%を抑えたほか，真鍋勝の地盤である美馬郡でも35.48%の票を集めた。両郡の票が秋田の総得票に占める割合は，83.52%である。秋田は大選挙区制時代から衆院選に出馬しており，各郡で自らの勢力を伸ばしていた。三好郡や美馬郡以外にも一定の支持層を有しており，各郡で得票を伸ばすことができるだけの地盤を築いていた。ただし，翼賛選挙では板野郡と麻植郡を地盤とする推

薦候補者が立候補したため、三好郡と美馬郡以外の票は伸びていない。

次に三木與吉郎である。三木與吉郎の場合、父親が貴族院議員を務めていたとはいえ、自らは政治経験がなく、選挙には初出馬となった。三木與吉郎の得票の特徴は、地盤である板野郡の票が、総得票に対して91.76%を占有したことである。地盤の票が総得票に占める割合としては、歴代の徳島2区から立候補した候補者と比較しても最も高い数値である。反対に、板野郡以外の4郡の票は計1,043票に留まった。それにもかかわらず当選できたのは、板野郡が県内で最も多くの有権者数を有していた郡であったことに拠る。板野郡の有効得票数である20,166票の57.78%を抑えたことで、得票数が上昇し、当選したのである。

推薦候補者の三人目は、落選した三木熊二の票である。三木熊二は地盤である麻植郡の72.09%の票を占め、5,896票を獲得している。また麻植郡に隣接する郡では、阿波郡で44.68%の票を抑えて同郡でトップとなった。美馬郡では同郡の票の占有率としては7.93%であったが、千票を超える票を獲得している。三木熊二は落選した1936年4月の総選挙でも、麻植郡の64.42%、阿波郡の37.97%の票を占めており、翼賛選挙でもこの時の選挙と同様の得票傾向となっている。

以上の3名の推薦候補者の間では、秋田清が美馬郡と三好郡、三木與吉郎が板野郡と麻植郡の東部、三木熊二が麻植郡の大部、阿波郡、美馬郡で票を分け合うという地域割りの協定ができあがっていたという⁵²。実際の得票を見ると、三木與吉郎の麻植郡の得票が伸び悩んだものの、ほぼこの協定通りとなっている。推薦候補者間の地域割り協定は機能していたと評価できる。この協定が3名の推薦候補者を当選させることを目的として結ばれていたことは、言うまでもない。それにもかかわらず、三木熊二のみが落選した。地盤とする麻植郡の有権者数が郡内でも少なかったこと、割り当てられた郡で非推薦候補者に票を奪われたことが落選の原因である。

次に、非推薦候補として出馬した真鍋勝と三木武夫の得票を分析する。真鍋の場合、中選挙区制の際の得票は、地盤である美馬郡と、美馬郡に隣接する三好郡における票が中心であり、少なくとも総得票の75%はこの両郡での得票である。これに対して他の3郡の票は伸び悩んでおり、いかに美馬郡と三好郡で多くの票を獲得するかが当選の鍵となっていた。1937年4月の選挙と比較すると5郡すべてで票を減らしており、美馬郡の票の占有率が68.77%から50.29%に、さらに三好郡でも38.47%から19.42%と、いずれも大きく落ち込んだことが落選の要因となった。推薦候補者の秋田清と三木熊二が得票を伸ばすべく美馬郡で攻勢を掛けたことにより、真鍋の美馬郡における票が奪われたのであった。

一方、三木武夫について見ると、三木は地盤である板野郡で6,551票を獲得した。同じ板野郡を地盤に三木與吉郎が出馬して同郡の57.78%の票を抑えたため、三木武夫の票が板野郡の有効得票数に占める割合は32.49%となった。もっとも、初出馬の時も、三木は板野郡では同じ板野郡を地盤としていた高島兵吉の後塵を拝していた。その際の三木と高島の板野郡の占有率は、三木が35.94%、高島が48.83%であった。したがって、三木の票の板野郡における占有率は前回の選挙から3.45%減であり、板野郡を地盤とする推薦候補者がいたにもかかわらず、占有率の減少が僅少に

とどまった。非推薦候補の三木武夫を支援した町村長もおり、三木武夫の板野郡における地盤が強化されていたことを示している。

前回の選挙では全候補者でトップの票を取った阿波郡と麻植郡ではそれぞれ二位となった。これは、麻植郡を地盤とする三木熊二が出馬した影響による。それでも三木武夫は阿波郡で39.05%の票を占め、2,585票を獲得した。三木熊二との差は373票差である。阿波郡の全町村長が推薦候補者の三木熊二を支援したこと⁵³を考慮すると、この両者の票差は阿波郡における三木武夫の強さを示している。また、三木熊二の地盤である麻植郡においても、三木武夫は13.2%の票を占め、同郡における三木武夫の票は千票を超えた。

その他注目すべきは、三好郡における票が前回と比べて伸びていることである。1937年の選挙では6.58%だった三好郡における占有率は、翼賛選挙では12.31%にまで伸び、票数も1,395票に増加した。三好郡で三木武夫の票が伸びた要因は判然としない。ただし、徳島2区では青年層を中心に三木武夫に対する支持が広がっており⁵⁴、そのことが同郡の三木武夫票が増大した要因であろう。

以上の得票の分析から、徳島2区において、三木武夫の地盤が強化されていたといえる。

3-2 三木武夫の当選要因

なぜ非推薦候補者でありながら、三木武夫は当選できたのだろうか。次にその要因を指摘したい。

第1に、三木武夫が徳島2区の5郡のなかで最大の有権者数を持っていた板野郡を地盤にしていたためである。徳島2区は有権者数が郡によって大きく異なっていた。中選挙区制での徳島2区から出馬した各候補者は、5郡すべてではなく、自らの地盤の郡において票を伸ばすことを主要な柱にして選挙戦を戦っていた。そのため、有権者数が多い郡を地盤とする候補者は、地盤の郡の票をある程度抑えれば得票の絶対数を上げることができて有利であったのに対して、有権者数が少ない郡を地盤とする候補者は、たとえ地盤の郡で票を占めても、その票は選挙区全体では少ないために不利であった。徳島2区はこの特徴が顕著に現れていた。翼賛選挙における得票で見ると、三木が板野郡の票で占めた割合は約32%にとどまった。それでも有権者数が2万4千人を超える郡のため、約32%の占有率であっても票数としては6,551票となる。対立候補のうち、三木熊二が地盤の麻植郡の約72%を、真鍋勝が美馬郡の約50%を占めたにもかかわらず、票数としてはそれぞれ5,896票と6,944票で、三木武夫の板野郡の票以下か、わずかに上回る票数に留まっている。三木が板野郡を地盤としていたことでアドバンテージがあったわけである。

反対に、推薦候補者ではあった三木熊二は、地盤に関しては有権者数が板野郡の半数以下だった麻植郡を地盤にしていたため、三木武夫と比較すると不利であった。かつて1930年の衆院選で麻植郡を地盤に出馬した平野鍋吉は、地盤以外の郡でも得票を伸ばしてトップ当選を果たしていた。しかし、三木熊二は推薦候補者間に地域割り協定があったため、板野郡と三好郡における得票が見込めず、阿波郡と美馬郡の票をいかに伸ばすかが当選の鍵を握っていた。阿波郡では三木武夫を抑

えてトップには立ったものの、阿波郡で強い支持を得ていた三木武夫を決定的に引き離すことができず、美馬郡でも同郡を地盤とする真鍋勝のほか、秋田清も重点を置いて選挙戦を戦っていたため、三木熊二の得票は伸びなかった。その意味で、美馬郡を地盤とする真鍋勝が立候補したことも、結果的に三木武夫の当選を手助けしたといえる。

三木熊二の落選について、選挙後に大久保義夫翼協徳島支部長は、「三木熊二氏は強固な地盤を擁する真鍋氏と強敵三木武夫氏等県下政界の逸物両者の間に挟まれて苦戦は当初より覚悟であった、不利な情勢下にあつてよくも敢闘された」と語っている⁵⁵。大久保は、三木熊二の健闘を称えながらも、選挙戦当初から地盤の点で苦戦するだろうと見ていたことを明らかにしている。推薦する側も徳島2区の特徴を十分に把握しており、非推薦となった三木武夫か真鍋が当選する可能性が高いと当初から考えていたのである。

第2に指摘すべきは、徳島2区における三木武夫の地盤が強化されていたということである。有権者数の多い郡を地盤としていれば、必ず当選するわけではない。事実、それまでの総選挙でも板野郡を地盤とする候補者が落選している。地盤以外の郡でどれだけの票を得られるかも、無論重要であった。

この点について、三木武夫は板野郡以外でも、特に阿波郡での得票が多かった。三木は、板野郡で最も西部にあって阿波郡に隣接する御所村の出身であること、1941年に死去した三木の父親の久吉が阿波郡の柿島村の出身であったことがその要因であろう。また、すでにみたように、三好郡の票を伸ばしていた。地盤の郡以外にもまとまった票をとることができる郡を持っていたことが、三木武夫の当選をもたらした一つの要因であった。三木武夫の地盤は、非推薦となって干渉を受けても当選できるほど強固なものとなっていたのである。徳島の各界の有力者とは十分な関係を築くことができていなかったが、選挙区内における三木武夫への青年層を中心とする支持の拡がり⁵⁶が地盤の強さにつながっている。

第3に、代議士に当選した後の、三木の地元に着した活動が、有権者から評価を得ていたのではないということである。1回目の選挙から翼賛選挙までの5年間で、三木は表3にあるように頻繁に徳島へ帰県していた⁵⁷。

三木は1937年4月の総選挙で当選すると、7月の召集に先立って選挙区内の全町村を回り、併せて有権者との懇談会を開催した。三木は当選したとはいえ、必ずしも選挙区内で十分に知られていたわけではない。そのために、当選後すぐに選挙区内の視察と演説会開催を行っている。

また徳島陸軍病院慰問は、衆議院の決定を受けて実施されたものである。日中戦争の勃発後、衆議院は、日中戦争で負傷した兵士が入院する全国の陸軍病院に、慰問の目的で代議士を派遣していた。三木は毎年四国選出の他の議員とともに、徳島と高知の陸軍病院を担当し、兵士を慰問した。その他、選挙区内で災害や町村間の幹旋が必要な事案が出て来た場合にも、三木は徳島に戻っている。これだけ頻繁に徳島へ帰ったのは、言うまでもなく選挙区内で自らの存在をアピールする狙いがあったためである。

【表 3】三木武夫の帰県（1937～1941年）

1937年 5 月	徳島 2 区の町村勢視察，懇談会
1937年11月	徳島陸軍病院慰問，第71・72帝国議会報告会
1938年 9 月	風水害被害の慰問と実地調査
1938年11月	徳島陸軍病院慰問
1939年 9 月	旱害慰問，実地調査のために被害町村を巡歴
1940年 4 月	第75帝国議会報告会
1940年10月	徳島陸軍病院慰問
1941年 6 月	宮川内災害除去問題について関係町村の斡旋
1941年 9 月	墓参，時局講演会

注目すべきは、三木が徳島に1ヶ月以上滞在したケースが、確認できるだけで3度あることである⁵⁸。徳島県選出の代議士で選挙期間以外に徳島へ帰県したとしても、三木武夫のように長期間にわたって選挙区内に留まるような代議士はいなかった。これほど長い間三木が徳島に滞在したのは、有権者と接するべく、懇談会や議会報告会を選挙区内の各町村で実施するためである。この時期の三木は、こういった会を選挙区内の全町村で実施することを基本としていた。有権者との会合のために訪れた町村で、三木は有権者と膝詰めで座談会を開き、山間部の場合には会の後に支持者の家に泊まり込んだ。また演説会場では日中戦争下という状況で国民儀礼を行い、戦死者の遺族の家を訪ねて弔意を表していた。こうした、有権者に密着した活動が有権者の心をとらえ、三木の当選につながったと思われる⁵⁹。

以上のように、翼賛選挙で三木が当選したのは、徳島2区で有権者数が最も多い板野郡を地盤としていて有利だったこと、三木に対する支持が広がっていたこと、代議士として地元に着した活動を展開していたことに基因するのである。

おわりに

以上、三木武夫と翼賛選挙について考察した。本稿において明らかにしたことをまとめたい。

翼賛選挙にあたり、翼協徳島県支部は三木武夫を推薦すべきと翼協本部に内申せず、また翼協本部も支部の内申を覆すことはなかった。三木が推薦を得られなかった理由は翼協から明確に示されなかった。推測すると、徳島政界において影響力を有していなかったこと、三木に対する反感があったと思われること、翼同による現職議員の推薦増加を目的とした巻き返し運動の対象外となったことが、三木の非推薦の理由になったものと思われる。

非推薦候補として三木は、官憲からの干渉を受けながら選挙戦を戦った。三木は翼賛議会の確立、大東亜共栄圏の確立など、戦時下の総選挙を反映した事柄を訴えたほか、いかに自らが地元に着した代議士であったかということも強調している。

投票の結果、三木は最下位で当選を果たした。非推薦候補でありながら当選したのは、徳島2

区で最も有権者が多い板野郡を地盤にしている有利であったこと、非推薦候補として官憲から干渉を受けても当選できるまでに徳島2区における三木の地盤が強くなっていたこと、代議士に当選後の地元に着した活動が評価を受けていたであろうことにあった。

三木は翼協から推薦されることを望んでおり、非推薦候補となったことは不本意であった。しかし、三木が非推薦となったことは、その後の政治活動において決定的に重要な意味を持つことになる。敗戦後のGHQによる公職追放を免れ、占領下において代議士として活動を続けることができたためである。占領下に三木がどのように活動したのかを明らかにすることが次の課題となる。

註

¹ 翼賛選挙全般に関する先行研究としては、横越英一「無党時代の政治力学(2)」(『名古屋大学法政論集』33, 1965年), 升味準之輔『日本政党史論』第7巻(東京大学出版会, 1980年), 吉見義明・横関至「解説」(吉見義明・横関至編『資料日本現代史5 翼賛選挙②』大月書店, 1981年), 古川隆久『戦時議会』(吉川弘文館, 2001年)がある。

翼賛選挙とその結果をめぐるのは、栗屋憲太郎『昭和の歴史6 昭和の政党』(小学館, 1983年)や木坂順一郎『昭和の歴史7 太平洋戦争』(小学館, 1982年)が、この選挙によって議会が翼賛議会化されて天皇制ファシズムが完成したと位置づける。これに異を唱える研究として、中村勝範「翼賛選挙と旧政党内」(『法学政治学論究』第10号, 1991年), 玉井清「東條内閣の一考察—大塚唯男を中心に—」(『神奈川工科大学研究報告A 人文社会科学編』13, 1989年), 前掲, 古川隆久『戦時議会』, などがある。

その他、選挙区レベルの研究として、中村政弘「千葉県における「翼賛選挙」運動について」(『千葉県の歴史』第20号, 1980年), 兩宮昭一「翼賛体制の一側面」(前掲, 吉見義明・横関至編『資料日本現代史5 翼賛選挙②』付録月報), 波田永実「翼賛選挙の地方的展開」(『明治大学大学院紀要 政治経済学篇』23巻3号, 1986年), 小栗勝也「翼賛選挙と旧政党内の地盤—熊本第一区の事例—」(『法学政治学論究』第11号, 1992年), 荒川隆「秋田県の翼賛選挙の実態」(『秋田近代史研究』第34号, 1994年), 藤井徳行・大木辰史「昭和十七年・兵庫県翼賛選挙に関する一考察」(古川治ほか『伝統と創造』人文書院, 2000年), 加地直紀「翼賛選挙と尾崎行雄—尾崎の政治思想との関連」(『平成法政研究』第9巻2号, 2005年)などがある。

また、翼賛政治体制協議会については、菅原和子「翼賛選挙における『新党運動』」(『法学新報』107・7・8, 2000年12月), 奥健太郎「翼賛選挙と翼賛政治体制協議会」(寺崎修・玉井清編『戦前日本の政治と市民意識』慶應義塾大学出版会, 2005年)に詳しい。

² 竹内桂「第20回衆議院議員総選挙における三木武夫の当選要因」(『政治学研究論集』第36号, 2012年9月)。

³ 竹中佳彦「政党政治家・三木武夫の誕生」(『北九州市立大学法政論集』30巻3・4号, 2003年1月)。村松玄太「三木武夫の初期議会活動」(小西徳應編『三木武夫研究』日本経済評論社, 2011年)。

⁴ 徳島県全体の翼賛選挙を検討した研究として、竹内桂「徳島県における翼賛選挙」(『史窓』第43号, 2013年3月刊行予定)を参照。

⁵ 前掲, 奥健太郎「翼賛選挙と翼賛政治体制協議会」223頁。

⁶ 「翼賛選挙貫徹運動基本要綱」の全文は、吉見義明・横関至編『資料日本現代史4 翼賛選挙①』(大月書店, 1981年)50～51頁。

⁷ 翼協結成までの経緯については、前掲, 奥健太郎「翼賛選挙と翼賛政治体制協議会」222～229頁を参照。

⁸ 大久保の経歴については、脇町誌編集委員会編『脇町誌』(脇町誌編集委員会, 1961年)323～325頁。

⁹ 各会員の肩書きは、「翼賛政治体制協議会地方支部会員名」(前掲, 吉見義明・横関至編『資料日本現代史4 翼賛選挙①』)171頁, ならびに『朝日新聞 徳島版』1942年3月21日に拠る。

¹⁰ 徳島県の推薦候補者の銓衡過程については、前掲, 竹内桂「徳島県における翼賛選挙」を参照。

¹¹ 三木武夫「議員生活二十五年」中(『徳島新聞』1962年8月6日)。三木は、永年在職議員として表彰されたことを受けて、この回顧録を『徳島新聞』に寄稿した。

- ¹² 「日米同志会創設趣意書」（三木武夫関係資料2 1242）。明治大学史資料センター所蔵。趣意書の全文は以下の通りである。

吾々は世界の存在を無視して自己の存在はない、殊に世界の指導的国家たる地位と本質を持てる米国に対しては一層の認識を高むべきであると思ふ。此の意味に於て吾々は不断米国の実態を識り又日本の実態を識らしめて相互の理解と親善を深め相提携するの人類の意義を把握すべきである。茲に於て吾々は日米同志会を創設して広く志を同じうする両国民の接近、交歓、親善の機会を助長促進する為の機関としたいと思ふのである、各位の賛同を望む所以なり。

以上

昭和十三年五月

- ¹³ 三木武夫「『非推薦』翼賛選挙」（三国一朗編『私の昭和史4 太平洋戦争後期』番町出版、1974年）10頁。
- ¹⁴ 同前、13頁。
- ¹⁵ 三木武夫「日米戦うべからずー「日米親善国民大会」を回想してー」（三木武夫出版記念会編『議会政治とともに』下巻、三木武夫出版記念会、1984年）127頁。ちなみに、三木以外の登壇者は、今井五介、高橋亀吉、米田實、岩瀬亮、竹内重利、松田竹千代、原口初太郎、中野金次郎、菊池寛、大山卯次郎、永田秀次郎、賀川豊彦、植原悦二郎である（『読売新聞』1938年2月19日。『東京朝日新聞』1938年2月19日）。前掲、村松玄太「三木武夫の初期議会活動」146頁を参照。
- ¹⁶ 前掲、竹中佳彦「政党政治家・三木武夫の誕生」141頁。
- ¹⁷ 『読売新聞』1938年2月17日。
- ¹⁸ 『羅府新報』1938年2月20日。
- ¹⁹ 同前。大会でこの決議文は採決され、ルーズベルト大統領やハル國務長官、上下院の有力議員に写しを送ることになった。
- ²⁰ 前掲、竹中佳彦「政党政治家・三木武夫の誕生」151頁。
- ²¹ 樋口政市『萬峰に風雨あり』（萬峰に風雨あり刊行会、1997年）51頁。
- ²² 三鬼陽之助『三木武夫』（サンケイ新聞出版局、1975年）24頁。
- ²³ 三木武夫『謹みて徳島県第二区有権者各位の御心眼に慇へ奉る』。明治大学史資料センター所蔵。前掲、村松玄太「三木武夫の初期議会活動」160頁。
- ²⁴ 三木の最初の衆院選については、前掲、竹内桂「第20回衆議院議員総選挙における三木武夫の当選要因」を参照。
- ²⁵ 前掲、脇町誌編集委員会編『脇町誌』324頁。
- ²⁶ 『徳島新聞』1942年4月7日付夕刊。支部会員の岸野牧夫も、秋田清の推薦届出人であった。
- ²⁷ 徳島県支部の内申段階で推薦から漏れていた田村秀吉は、秋田清に支援を求めて翼協本部に働きかけ、追加で推薦を受けることになったという。（「翼賛選挙の実体を衝く」上、『徳島新聞』1946年1月28日）。秋田清の実力を示していよう。
- ²⁸ 前掲、三木武夫「『非推薦』翼賛選挙」12頁。
- ²⁹ 同前、14頁。三木を支援した「顔役」が皆無だったわけではない。板野郡の瀬戸町長や北灘村の翼賛壮年団長は三木を支援していた。
- ³⁰ 前掲、三木武夫「議員生活二十五年」中。なお、三木は当時の今松次郎警保局長に「同じ四国人のよしみで、選挙取り締りは推薦扱いとしてもらいたい。選挙干渉だけは勘弁してもらいたい」と頼み込み、今松から推薦扱いを取り付けたという（宮村文雄『活字にならなかった戦後政治』泰流社、1986年、139頁。前掲、竹中佳彦「政党政治家・三木武夫の誕生」165頁）。仮にそのようなことがあったとしても、三木武夫への干渉がなくなったわけではなく、どの程度の効力があったのかは疑問である。
- ³¹ 前掲、三木武夫「『非推薦』翼賛選挙」14～15頁。
- ³² 前掲、樋口政市『萬峰に風雨あり』52頁。
- ³³ 石田博英『私の政界昭和史』（東洋経済新報社、1986年）30頁。前掲、竹中佳彦「政党政治家・三木武夫の誕生」151頁。
- ³⁴ 前掲、樋口政市『萬峰に風雨あり』52～53頁。
- ³⁵ 前掲、三木武夫「『非推薦』翼賛選挙」15頁。

- ³⁶ 同前, 16～17頁。
- ³⁷ 「翼選を顧みて」下 (『朝日新聞 徳島版』1942年5月6日)。
- ³⁸ 『朝日新聞 徳島版』1942年4月11日。
- ³⁹ 前掲, 「翼選を顧みて」下。
- ⁴⁰ 前掲, 三木武夫「「非推薦」翼賛選挙」12頁。
- ⁴¹ 前掲, 樋口政市『萬峰に風雨あり』52頁。
- ⁴² 横山昇一編『大東亜建設代議士政見大観』(都市情報社, 1943年) 1170～1173頁。後に, 芳賀登ほか編『日本人物情報大系29 憲政編9』(皓星社, 2001年) に所収。引用は後者の435～436頁に拠った。
- ⁴³ 前掲, 三木武夫『謹みて徳島県第二区有権者各位の御心眼に懇へ奉る』。以下, 特に註がない場合, 引用はこれに拠る。
- ⁴⁴ 三木は最初の総選挙でも, 臣民として忠孝と両親に対する忠孝を遂げたいとして; 有権者の情に訴える表現を用いていた。前掲, 竹中佳彦「政党政治家・三木武夫の誕生」139頁。小西徳應「三木武夫の政治的絶対性」(前掲, 小西徳應編『三木武夫研究』所収) 46頁。
- ⁴⁵ 実際, 片カナの投票が多かった。前掲, 「翼選を顧みて」下。
- ⁴⁶ 前掲, 三木武夫『謹みて徳島県第二区有権者各位の御心眼に懇へ奉る』。三木とも親交のあった三鬼陽之助は, 三木の選挙戦について, 「選挙中も, 日米戦うべからずをぶった訳でなく, 推薦文に, 右翼の大物・頭山満の名をつらねていた」との説が戦後に流布されたことを紹介している (前掲, 三鬼陽之助『三木武夫』24頁)。ここにある推薦文とは, このパンフレットを指している。
- ⁴⁷ 前掲, 三木武夫『謹みて徳島県第二区有権者各位の御心眼に懇へ奉る』。
- ⁴⁸ 前掲, 三木武夫「「非推薦」翼賛選挙」17頁。
- ⁴⁹ 『徳島新聞』1942年5月3日。
- ⁵⁰ 『第二十一回衆議院議員総選挙一覧』(衆議院事務局, 1943年) 471頁。
- ⁵¹ 前掲, 竹内桂「第20回衆議院議員総選挙における三木武夫の当選要因」69頁。
- ⁵² 前掲, 「翼賛選挙の実体を衝く」上。
- ⁵³ 「翼選を顧みて」上 (『朝日新聞 徳島版』1942年5月5日)。
- ⁵⁴ 同前。
- ⁵⁵ 『徳島新聞』1942年5月3日。
- ⁵⁶ 前掲, 「翼選を顧みて」上。
- ⁵⁷ 前掲, 三木武夫『謹みて徳島県第二区有権者各位の御心眼に懇へ奉る』, 『徳島日日新報』, 『徳島毎日新聞』より作成。
- ⁵⁸ 1937年5月, 1937年11月, 1938年9月の3回。なお, 滞在期間は不明だが, 三木は1940年4月の報告会では, 降雪のために訪問できなかった祖谷以外のすべての町村を訪問している。
- ⁵⁹ 前掲, 樋口政市『萬峰に風雨あり』52頁。

(付記) 本稿は, 明治大学大学院生研究調査プログラム (2012年度) による研究成果の一部である。